

- 天才の苦悩と孤独を描く
  - 作品の魅力 — 「天才の苦悩と闇」の描写
  - オッペンハイマー
    - “破壊の責任”を背負わされる
    - 政府から称賛 ⇒孤独
  - 
    - ロスアラモスでの演説
    - 床が崩れ落ちる感覚
    - 印象的なシーン
- 映像と音で描く内面劇
  - 時系列をあえて交錯 — 物理学的な多層構造を疑似体験
  - 
    - 白黒 — 「客観的視点」
    - カラー — 「オッペンハイマーの主観」
    - ⇒ 現実と記憶、内面と外界を自在に行き来
    - 映像
  - 原爆実験“トリニティ”
    - 閃光だけで爆発を表現
    - 物理現象と映画的演出が融合
- 科学と倫理の対立構造
  - 葛藤 — 科学と倫理、個人と国家 — 揺れ動く葛藤
  - 査問会
    - “告発劇”のような緊張感
    - 主人公は一度も大きな反論をしない
    - 科学者としての覚悟の表れ
  - 
  - アインシュタインとの会話 — 倫理や政治の暴走